



「汝の名は憂なしという。
私をして憂なからしめよ」
～無憂樹・うれいなしの樹～

長嶺胃腸科内科外科医院
長嶺 信夫

1. 恋の花

インドの故事にある話である。インドのスタナ王子がキンナラの王女マノーハラに恋いこがれ、その居場所を探し求めて、美しい花が咲きみだれているアショーカ〈無憂樹〉の樹の下で、「汝の名は憂なしという。私をして憂いなからしめよ」と泣きつき、思いのたけを訴えたという。恋する人に会いたい！恋する王子のせつない思いである。スタナ王子はやがてキンナラ城にたどりつき、王が課した幾多の試練を乗り越え、マノーハラとの結婚がゆるされたという。

またインドには次のような言い伝えもある。恋をする乙女がこの樹の根元に口づけをして花が開くと恋が成就するというのだ（写真1）。

また、ブッダ（釈迦）の母・マーヤー（摩耶）夫人が懐妊し、お産のため里帰りの途中、アショーカの花が美しく咲き乱れているルンビニー園で休息した。咲いている花々のあまりの



写真1. 無憂樹の花（沖縄海洋博記念公園熱帯ドリームセンター）。

美しさに夫人が手をあげてアショーカの樹の枝に触れようとした時、急に産気づき、その樹の下でブッダを出産したという。

このことに関して、玄奘三蔵の「大唐西域記」第6巻には「箭泉より東北へ行くこと8, 90里でルンビニー林に至る。釈種が水浴する池がある。水は清く鏡のように、とりどりの花は咲き乱れている。その北、24, 5歩の所に無憂花（アショーカという花）の樹があるが、今はもう枯れてしまっている。菩薩が降誕された処である」と記され、「中村元選集（決定版）第2巻、ゴータマ・ブッダⅠ」によると「過去現在因果経」でも無憂樹の下でブッダを出産したと記載されているという。また、お産が軽かったため、この樹の名前をアショーカ（Asoka, Ashoka）と名付けたともいわれ、「ア」はサンスクリット語で「否定」を、「ショーカ」は「憂い」を意味し、そのため「無憂樹」と訳されていて、インドや東南アジアなどの仏教寺院に聖樹としてよく植栽されている。・・・ただし、ブッダの出産に関して中村元によると、「ジャータカ序（Jataka, vol. I, p.52）」にはブッダは無憂樹の下ではなく、サーラ（沙羅）の樹の下で出産したと書かれているという。それによると、「この二つの都のあいだに、両方の都の住民のためのルンビニー園という名のめでたいサーラ樹の森があった。そのとき、根もとから枝の先端まで、すべて、一面満開の花であった。～中略～かの女は手をのばして枝をとらえると、まさにそのときに、陣痛が起こった。～中略～かの女はサーラ樹の枝をとらえて、立ったまま胎児を出生した」という。しかし、その後の諸仏伝では、無憂樹のもとでの誕生ということになっている。このことに関して菩提樹を贈呈してくれたスメダ尊師にきいてみたところ「^{サーラ}沙羅の樹の下で誕生した」と答えてくれた。多分、「ジャータカ序」の記載に基づいているのだろう。

またインドの神話の中では無憂樹はヒンズー教の神・シヴァの妃パールヴァティーが彼女の夫シヴァ神を得ようという願望を成就させるた

めにその樹の下に座して瞑想したといわれ、またシヴァ神も無憂樹を最も好み、祝福を与えており、ヒンズー教の多くの霊樹の中でも重要な位置を占めている。今回の旅行中も仏教寺院だけでなく、ヒンズー教寺院境内でも無憂樹をよく見かけたものである。

前書きが長くなったが、それにしても色々面白い言い伝えのある樹である。中でもブッダ誕生にまつわる話はことのほか有名で、このため、「無憂樹」は悟りの樹といわれている「菩提樹」や涅槃の樹といわれている「沙羅双樹」とともに「仏教3大聖樹」として尊ばれている。

2. 新たな夢

またひとつ夢がふくらんできた。沖縄菩提樹苑に沙羅双樹とともに無憂樹を植え、仏教3大聖樹をそろえようではないか！そうすれば、菩提樹苑は沖縄の新たな観光名所になるだろう。そして、観光名所になれば、おのずと菩提樹苑に多くの人達が集まるはずだ。その機会を利用して菩提樹植樹の意義を人々に周知させることができるだろう。そうだ！沙羅双樹ももっと前面に出そう！沙羅双樹は平家物語の巻頭の一節を知る人にとっては菩提樹以上に有名ではないか。

ところで、夢をいだくのは簡単である。しかしその夢を実現させるのは容易なことではない。実際、沙羅双樹と無憂樹の苗木の入手をインドにつてのある人達に何回となく依頼したのだが入手できないまま2年が過ぎてしまった。2004年10月に4度目のインド訪問をした時も、2006年4月にタイを訪問した時も、沙羅双樹や無憂樹を入手することはできなかったのである。

ところで、無憂樹はインドや東南アジアなど熱帯地方でしか育たない樹と思われがちである。しかし、ブッダ誕生の地・ルンビニーはインド国境に接したネパール領内にあり、冬はかなり寒く、0度近くまで気温が下がる。それなら雪が降る本土では無理としても、暖かい沖縄に無憂樹が育っていても不思議ではないはずだ。

2006年7月30日、かすかな望みをいだいて東南植物楽園を訪ねてみた。ひととおり園内を見



写真2. 東南植物楽園に植えられている無憂樹の類縁種キバナサラカ。

学したあと案内人に「無憂樹はありませんか？」と聞いてみたところ、「専門の方をお呼びします」と紹介された前田叶氏は「無憂樹はありませんが類縁種の『キバナサラカ』はあります」と言われ、樹の所に案内された。そこには5mほどに成長した2本のキバナサラカ（学名：*Saraca thaipingensis* Cantley ex King）が露地に植えられていて、マメ科の植物である無憂樹（学名：*Saraca indica* L）の類縁種とのことであった（写真2）。キバナサラカの葉はインドの竹林精舎で見た無憂樹の葉のように、対になって羽のように枝から出ていて（羽状複葉）、新葉は特徴的な淡い褐色で濡れた布のようにたれさがっていた。ところで、キバナサラカの樹は無憂樹の葉が細長いのに比較し葉が少し大きい以外素人目には区別がつかない。色々お聞きしているうちに、前田氏は沖縄菩提樹苑のこともよく御存知であり、無憂樹が沖縄海洋博記念公園 熱帯ドリームセンターの温室内に植樹されていることを教えてくれた。

熱帯ドリームセンターに無憂樹がある。やはり沖縄にもあったのだ。それなら海洋博記念公園に事情を説明し、取り木を依頼することができるのではないだろうか。

早速事情を説明し、取り木苗を要望するため、8月20日海洋博記念公園管理財団を訪問した。財団では多忙な中、花城良廣本部長、西銘宜孝課長、峯本幸哉技師に面談することができた（写真3）。管理財団では露地（温室外）のう



写真3. 御協力いただいた花城本部長（前列右）、西銘課長（左）、峯本技師（後列左）。

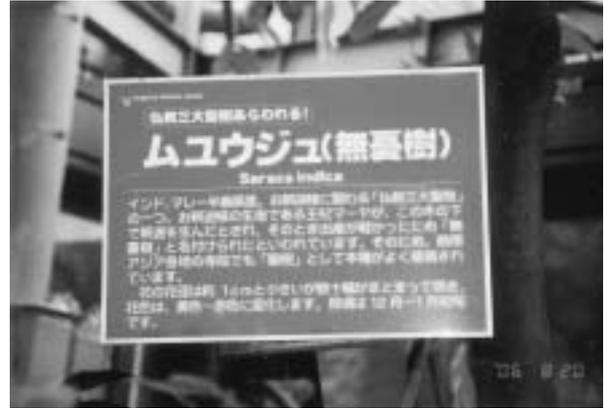


写真5. 熱帯ドリームセンターの無憂樹の表示板。



写真4. 熱帯ドリームセンターに植栽されている無憂樹。

え潮風の強い菩提樹苑で無憂樹が育つのかどうか懸念しながらも、取り木をして贈呈してくれることを快諾するとともに沙羅双樹のことなど色々アドバイスをしてくれた。面談後に温室内の無憂樹を見せてもらったところ、早速取り木の処置がなされていて、その好意的取り計らいに深く感謝した。

ところで、熱帯ドリームセンターの無憂樹をよく見てみると、温室内という環境のせいなのか、インドで見た無憂樹に比較し、葉と葉の間隔（葉間）が極めて長く、枝は「シダレヤナギ」のように垂れ下がっていて、いかにも過保護の「もやしっ子」のようにみえた。そばに立てかけてある説明版には「仏教3大聖樹あらわ

れる！」と記載され、その名のいわれとともに、花は12月から1月初旬が見ごろと書かれていた（写真4、5）。

3. インド5度目の訪問 まだまだまされた！

2006年10月下旬沙羅双樹と無憂樹の苗木入手を最大の目的に5度目のインド訪問をした。祇園精舎で早速無憂樹と対面したものの、苗木を入手することはできなかった。釈迦入滅の地・クシナガラに着いてみると、無憂樹が街路や寺院境内によく植栽されている。無憂樹をよく見てみると、葉は細長く、新葉は薄茶色ないし淡い紫がかかった濡れた布のようになたれさがっていて、実に美しい（写真6、7）。

近くに苗木はないだろうか。道路際の草むらを見回し、苗木を探し回る筆者を横目に、家畜の餌にするのだろうか、無憂樹の枝葉を馬の背に乗せ運んでいる人がいる。時間は限られている。現地の子供達に無憂樹の写真をみせ、持参したプラスチック製のヘラを貸し与え、苗木の入手を依頼するとともに、自らも草むらにはえている苗木を掘り取ることにした。

ところが、インドは乾季が長く続くためであろう、木々は地上部分の2倍以上の長さの根があり、それがゴボウのようにまっすぐ地中深く伸びている。そのため途中で根が切れてしまい、うまく採取できない。子供達が持参した苗木も根が途中で切れていたり、別の木であったりでまともなものはほとんどなかった。

クシナガラでの滞在期間は僅かに半日、しか



写真6. クシナガラの涅槃堂の境内に植栽されている無憂樹(左)と沙羅双樹(右)。



写真7. 涅槃堂境内に植栽されている無憂樹。赤褐色の幹をしていた。

も自由時間は2時間たらず、もう夜である。明日は朝6時出発とのこと、念願の沙羅双樹の苗木は入手したが、無憂樹も是非手に入りたい。・・・お釈迦様は「知足：足るを知る」と欲をださないよう説いているが・・・苗木入手のため今回の旅行を企画し、なげなしの金をはたいてわざわざインドまで来ている！ホテルの従業員に持参した無憂樹の花の写真とホテル前に生えている無憂樹の樹を見せ、翌朝までの苗木の入手を依頼した。

翌朝、薄暗いなか、従業員に「Asoka（無憂樹）？」ときくと「Yes」と言う。苗木1本を受け取り、お礼に100ルピーを渡す。走り出したバスの中で苗木を品定めすると、どうもおかしい。マンゴーの苗木であった。インド出身の添乗員に「まただまされた！」と言うと、「インドはそうですよ」と日常茶飯事との答が返ってきた。インドは5度目の訪問だけど、インド人には度々だまされていて、今度もあきれて次の言葉が出なかった。インド人はどうしても嘘ばかりつくのだろうか！

4. 無憂樹の苗木入手・・・しかし・・・

次の訪問地・サールナートのムラガンダ・クティ寺院は菩提樹を贈呈された寺院である。寺院の参拝と菩提樹拝観を終え、スメダ尊師の事務所に向かう間もあちこち見回して無憂樹の樹

を探するのに余念がない。専門書に無憂樹は挿し木または実生で育つと書いてあったので場合によっては樹の枝を持ち帰ろうとカッターナイフも用意してきている。ようやく1本の無憂樹を見つけることができた。よく見ると樹の下に苗木が沢山はえているではないか。しかし辺りはもうすっかり暗くなっている。スメダ尊師に頼み、翌日使用人に掘り取ってもらうことにした。

インド滞在最終日、植物検疫のため根を包んだ土を取り除いてがっかりした。現れた根はゴボウのように真っ直ぐのび、細根はなく、それに根が途中で切れている。これで育つだろうか。不安になってきたが仕方がない。自分が掘り取った種つきの小さな苗木はツアー仲間に分け与えてある。その苗木に望みを託し沖縄に帰ってきた。

専門書には挿し木で育つと記述されているものの案の定持ち帰った無憂樹の苗木のほとんどが根づくことなく枯れてしまい、種つきの小さな苗木だけが根付いている。それでも全部の苗木が枯れないでよかった。1本でも育ったら取り木で増やすことができるだろう。また、沖縄海洋博記念公園管理財団にも取り木を依頼してある。その木を沖縄菩提樹苑に植樹する事ができる。

2007年1月7日と2月12日に熱帯ドリームセ



写真8. 熱帯ドリームセンターの無憂樹の花 (2007年2月12日撮影)。

ンターで無憂樹の花を見ることができた (写真8)。専門書に1年中花が見られると記載されているものの、4月下旬から5月初旬にかけ2回、7月に1回、10月中旬と下旬に各々1回、計5回インドを訪問したが、花が咲いているのに出会ったことはないのである。インドで咲く花の中で、最も美しい花のひとつと言われるだけに、はじめてみる花は黄橙色の美しい花であった。花は美人が触れると色が変わるなどの言い伝えがあるが、花は手の届かない高さで咲いていた (2007年2月記)。

参考文献

1. 満久崇麿：仏典の植物、八坂書房、1995年。
2. T. C. マジュプリア著 西岡直樹訳：ネパール・インドの聖なる植物、八坂書房、1996年。
3. 玄奘著 水谷真成訳注：大唐西域記 (全3巻) 2、平凡社、1999年。
4. 中村元選集 (決定版) 第11巻、ゴータマ・ブッダ I、春秋社、2005年。
5. アボック社出版局編集：日本で育つ花木植栽事典、アボック社、1998年。



「沖縄菩提樹苑」